

## シベリアの思い出

岩手県 土川 清

昭和十九年九月徴兵検査を受け、十月一日付けをもつて盛岡工兵隊に現役兵として入隊した。渡満のため各種検査を受け、十月十二日夜、軍用列車にて盛岡をあとにして、一路どこに行くかもわからず車中の人となる。

戦時中のため、要所要所の市街地通過時には窓に暗幕を張り、一路原隊へと向かった。

博多く釜山（朝鮮）く新義州く安東（満州）く新京く北安く孫呉にて下車、ソ連の戦車対策としての陣地構築、一週間の作業を終えての十一月三日月明かりの夜、北満の地、瓊琿の部隊に配属となり、翌年三月まで初年兵教育を受ける。部隊は内地防衛のため幹部候補生を残し、全員転属する。

昭和二十年七月一日、チチハル工兵幹部教育隊に入

隊。将来の幹部将校としての教育訓練中、ソ連の参戦に遭い終戦。ハルビンにて武装解除の後、香坊の砲兵隊の空き兵舎に移動させられる。八月二十二日、ソ連軍の命令でハルビンを出発する。自動小銃（マンドリン）を持った警戒兵が「ダバイ、ダバイ」と近づいて、時計、万年筆、バンドなど、目ぼしいものは何でも取られた。駅に着くと多くの日本兵が集まり、列車を待つていた。ここでも物取りが横行している。

夕方、いよいよ列車に乗る。貨物列車である。新京方面に向かえば帰国だ。牡丹江方面であれば、ウラジオストク経由で帰国か。うわさやデマが飛び交う不安の中にもかすかな望みを抱いていた。列車は牡丹江方面に向かって発車した。無蓋車に乗せられ、肩を寄せ合う。途中降雨に遭い全員びしょ濡れ。朝になり、横道河子に停車。マンドリン（自動小銃）を持った童顔のソ連兵に監視をされながら、川に沿った谷間の道を歩き始めた。横道河子一帯は激戦の跡が生々しく残っていた。洋風の家には無数の弾痕があり、川の中には戦死した日本軍人の死体が点々と放置されている。

行軍は横道河子の谷間から畑の中を通り野原に出て三  
昼夜続いた。野宿は道のそばに天幕を張り寝る。朝に  
なつて目を覚ますと、顔は夜露でびっしょりと濡れて  
いた。

三日目は雨となり、天幕をかぶつての行軍となつた。  
海林に到着、周囲は鉄条網で囲まれている。すでに北  
満の各地から、多くの日本兵が集結していた。我々も、  
空き地を探して天幕の設営に入る。各地からの集合部  
隊のため無統制で、烏合の衆の生活である。溜り水を  
思い思いに勝手に使い、青空便所で最悪の衛生状態で  
ある。下痢と栄養失調で多くの人が悩まされ、伝染病  
が広がり、毎日毎日十人から二十人の者が消されるよ  
うに死んでいった。

海林の収容所では作業大隊が編制され、次々と出発  
していったが、行き先はわからず、帰国だ、入ソだと  
いろいろなデマが流れた。心配が次第に募ってきた。  
牡丹江出発の日がきた。木枯らしの吹く凍りつく寒さ  
の中、三段ベッドにダルマストープのある貨車に乗り  
込む。列車には多くの食糧や水及び燃料が積み込まれ

て、旅の長さが想像されたが、ソ連車からは行く先は  
全く知らされず、内地帰還の夢はまだ持っていた。思  
い出深き満州の広野を眺めながら、貨車の中にうずく  
まって眠った。

国境の町、綏芬河の白樺の並木は今でも目に浮かぶ。  
黒龍江を渡る。列車はスピードを上げ、ひたすら走る。  
列車の走る方向を確かめようと太陽を見ると、北に走  
っている。予測していたこととはいえ、内地帰還の望  
みは皆無となり、最寒のシベリアで屍をさらさねばな  
らぬかと悲痛な覚悟を決めた。陽が上がり、列車は平  
原の寂しい駅にとまり、さらに列車は北へ北へと大雪  
原の中を進んでいく。雪原の中を列車は人間社会から  
遠ざかっていくように感じられた。列車は小さな駅に  
停車して、全員下車せよとの指示で荷物をまとめて降  
りる。外は二十センチ余り雪が積もっている。今夜は  
ここで宿泊することになる。大倉庫に入る。早速雪を  
溶かし、薪を集め、残り少なくなつた米を靴下から出  
し、飯盒炊さんにかかる。思い思いの夕食を済ませる  
ころには日暮れとなり、電気はない。大部屋は暗く、

寒く、人々は疲れ果てて言葉少なに土間の上に体を横たえた。帰国の望みは完全に絶たれた。

朝からトラックが数台来て、人員輸送が始まった。

「ダワイ、ダワイ」とせき立てられながら、二十〜三十人ずつ乗り込み、厚い天幕の覆いをかけられて出発した。道路が悪いらしく、ガタガタと大きく揺れながら奥へ奥へと進んでいった。何時間走ったか、トラックが止まる。長い間空き家であつたらしく、丸太の壁はすき間だらけで、ガタガタの扉から吹き込む風は肌を刺すようである。薪を燃やすペーチカの光がチラチラと揺れ、言いしれぬわびしい夜であつた。毛布もわら布団もないので、板の上に着のままで、背のうしろに横になると小雪まじりのすき間風が顔に吹きつける。シベリアのどこにいてもわかない。ただ寒さと重労働の毎日が続くことになる。こんな山奥に来て何をやるのかと思つたら、毎日毎日が伐採作業である。こうしている間に馬を連れてきたので、運搬班ができた。二一七収容所は、バム鉄道建設に携わる収容所であつた。伐採、木材運搬、製材、鉄道建設と各作業

班別に編制され、組織され、聞きなれない「ノルマ」を課せられ、なれない労働に昼夜にわたり過酷なまで、監視の下に働かされた。このころになると、健康度の検査があつた。一級から五級まであり、検査は、健康な人が疲労して体力が落ち、やせ衰えると、ソ連のドクターが尻の皮を引っ張って、伸びぐあいにより判断する。一級、二級は重労働に耐えられるということである。普通の作業、三級、四級になれば軽作業、健康度によつて作業ノルマが決まっていた。一級が百分とすれば、二級は八〇％でノルマ完了である。毎日の食糧がそれで決まるのだから、何と言つても作業量を上げてたくさん食べることを考えなければと思ひながらも、木材搬出作業の小生らは相手がいる、馬である。素直で健康な馬であれば何とかノルマを達成できるが、道産子のような小さな馬なら、幾ら頑張つても五〇％のノルマ達成、黒パンもいつも三百グラムぐらいにしかならない。

私は、毎月行われる健康度検査でもいつも二級で、休養させてはくれなかつた。休養している同僚を見る

とうらやましかつた。初期の食糧不足や重労働のため、栄養失調で倒れた者を何人か見せつけられたが、どんなに苦しくても生きていくことが最大の目標となった。シベリアにも夏がある。七月、八月になれば暑い。夕日が落ちると急に涼しくなる。鉄道作業隊のときである。野生のイチゴがたくさんとれる。飯盒に二杯取ればノルマが百%、三杯取れば一二五%と、囚人の監督も適当なものであった。だが、大助かりで黒パンも四〇〇グラム、賃金ももらった。監督はその夜、隣の町に行き、黒パン、砂糖、タバコなど、各種食糧品と交換しているようだった。このころになると伐採現場も遠くなり、搬出作業も容易でなく、ますますノルマ低下の原因となってきた。

二一七收容所も、作業の状態に応じ人員の移動が始まり、今まで一緒にいた同僚どもとも別れ、また山奥の收容所にて作業せざるを得なかった。ホルモリンの收容所に入ってからそこを去るまで、一五〇大隊という呼び名しか記録がない。そこが二一七收容所だと教えられるまでは知らなかった。木材搬出、俗に言う馬

兵である。生をうけてこの方、馬とのつき合いは皆無である。收容所では、経験の有無にかかわらず割り当て人選である。作業現場に行く馬も動作がにぶい、僕らと同じである。能力のすぐれない馬を持てばいつもノルマは達成できない。積み込みの人の手伝いを得て、適当な寸法の用材を回数だけは搬出するのが精いっぱい。急勾配、急カーブでは、冬はソリ、夏は車、一歩間違えると足を挟まれる。毎日毎日人が馬一体の真剣そのものであった。何で馬の尻を叩いてよく働き、こんなに精出してやらなければならないかと、ソ連人を恨んだものだ。

冬はとにかく寒くて寒くて、話にもならない。氷点下四〇度になれば作業が休みになるが、氷点下三〇度は普通のことです。日本兵が着用している外套は役に立たないので、何かの毛皮の外套が配布されました。顔も外気に触れると凍傷にかかるので、目だけ出して、あとはすっぽり帽子で隠していた。寒さ以上にこたえたのは飢えでした。朝夕はおかゆのようなスープとパン三百グラムくらいで、いつも空腹でやせ衰えて骨と

皮だけの状態でした。極度の栄養失調でしたが、ソ連側は、尻の皮を引っ張って伸びぐあいにより健康度を判断した。長年の労働により、健康診断の結果、三級となり、半日の労働となった。

シベリアの秋の到来は早い。寒波の来る前のコルホーズの馬鈴薯の収穫に総動員させられたが、トラクタ―で掘り起こしたものを拾って集めるだけであった。

その前にちよつと失敬ということになり、軍隊で何度となく訓練した第四匍匐で林より農場に侵入、畝の間を身を隠し失敬したまではよかつたが、余り夢中になり、側に立っていた歩哨に気づかず「ヤポonyaポン」と声をかけられ、ハツとした。幸い相手が足がちよつと不自由なので、すきを見て一目散に……。

何しろ小生、若いときは短距離の選手でした。夜の点呼に首実験にでも来られて発覚したらどうなつていただろうか。ぞつとする思い出。作業場の木の葉、草も食つた。馬糞が馬鈴薯に見え、拾つてみんなの目を盗んで飯盒で熔かし、スプーンでかき混ぜてみたら何も無い。がっかりしながら、雪でまた飯盒を洗い、そ

れて食事受領。今では考えられない状況でした。また、共產主義教育を進んで受けた人が作業を免除されたり、十分な食事を与えられたりしたのは悔しかった。仲間より、お前も頭を使えよとの便りを受け、疑心暗鬼にかられたのを覚えている。

ナホトカからの引揚船「永徳丸」で舞鶴に上陸したときは「よく生きて帰れた」というのが実感でした。舞鶴で金八百円也を頂戴した。今までの空腹が一気に爆発し、実家に着く前に無一文になったが、途中、鉄道沿線の婦人会の人たちの「長い間ご苦労さんでした」の出迎えの声、ホーム上の差し入れに、我先にと他人を押しつけ、手を突っ込み、恥ずかしさも忘れ、頭をおつつけながらいたことも、今では想像もつかない。

ナホトカの岸壁で、祖国に向かって声高らかに叫んだ青春の歌？

◎岩をかむ荒波を越えて行くのは俺達だ

今ぞ明け行く世紀の輝く朝ぼらけ

潮路をたどりてさらばさらばと アア

別れの歌を高らかに 祖國の波止場

最後に、志半ばにして亡くなられた友に対し、衷心より哀悼の意を捧げ、今はただ人間を二度と再び極限状態に追い込むような事態を招いてはならないと心から願うものである。

略 歴

本籍地 岩手県二戸郡一戸町高善寺字

野田一一六ノ三

現住所 盛岡市前九年三丁目十一ノ二十

生年月日 大正十三年十一月十三日

終戦時の居住地 ハルビン

入ソ日 昭和二十年十一月二十二日

抑留地 ホルモリン地区 第二二七收容所

作 業 伐採、木材搬出、製材、鉄道建設

引 揚 昭和二十三年六月一日

引揚船 永徳丸

上陸地 舞鶴

我が人生

福島県 宮城 善一郎

一、回 想

昭和十九年五月三十日、私にも再び『臨時召集令状』がきた。召集令状は薄赤い紙なので、軍隊に召集される時『赤紙』がきたと言って、だれでも極限の緊張感に襲われた。

『赤紙』一枚で戦地に行かなければならないのだから当然である。当時、一錢五厘の郵便料で村役場に配達された。召集者の家庭には役場の小使さんがいかにもすまなさそうに「おめでとうございます」と言って置いていく。

…臨時召集令状…

『昭和十九年六月三日午後一時まで仙台騎兵第二十五部隊に入隊すべし』

宮城善一郎 殿